

## 国語

### ◆概要◆

本年度の国語は、例年の出題形式を維持しつつ、抽象的思考力と全体把握力を重視した内容でした。全国でも屈指の文章量を誇る構成となっています。そのため、読解のスピードと正確性が求められます。難度については昨年度よりやや上がったものの一昨年度ほどではなく、全体で見ると「例年並みかやや難」といえるでしょう。文章全体を俯瞰し、筆者や登場人物の意図や思いを読み取る力が求められています。高得点を狙うには、質の高い文章に継続的に触れ、思考力を磨く学習を重ねていきましょう。

### ◆大設問ごとの出題傾向と難度◆

- 問一：漢字の読みとりは、「委囑」が一般的に聞き慣れない熟語で受験生には難度が高い出題でした。毎年出題されている熟字訓は、本年は「草履」でした。常用漢字表の付表は必ず確認しておいてください。書き取りに相当する問題はいずれも小学校で学習する漢字からの出題でした。日頃から文字に触れ語彙力を高めておきましょう。韻文は例年通り短歌と俳句の交互出題で今年は短歌の出題でした。「瀧の水」を下から眺める構図を正確に捉えられれば、比較的取り組みやすい問題でした。韻文では例年視覚的な要素が問われる傾向が続いており、作者の視点や情景を思い描く力が求められます。
- 問二：出典は永井紗耶子「秘仏の扉」です。例年よりやや短くなったものの、依然として相当な文章量がありました。話題の作家の作品からの出題で、受験生にとって印象に残る素材であったといえます。内容は、写真家の（小川）一真が、フェノロサとの交流を通じて、写真によって何を伝えるのかを模索していく場面です。「IDEA（アイデア）」という抽象的な言葉が出てきますが、この意味が直接問われることはなく、登場人物の心情の変化、技術者としての「光」と「影」の葛藤を丁寧に読み進めていくことが重要でした。また、朗読の仕方を問う問題も例年通り出題されています。（オ）は文章全体の流れを抽象化して把握する力を求める問題で、新しいタイプの出題です。思考力重視の傾向を反映した問題で、今後も継続する可能性があります。
- 問三：出典は吉岡洋「AIを美学する」です。AI（人工知能）と人間の知性との違いを「身体性」から論じた抽象度の高い文章で、受験生には読みにくく感じたと思われます。人間の知能は身体と不可分であり、AIは身体を持たないが人間の知識という身体性の痕跡を利用している、そのためAIと向き合うことは人間と向き合うことにもなるという内容は、相当な読解力と論理把握力を要します。選択肢自体は比較的整理されていましたが、筆者の主張と微妙にずれた表現を見抜く正確さが求められました。また、昨年度同様、全体理解を問う問題が出題されており、段落ごとの内容把握にとどまらない総合的な読解力が重要です。抽象度の高い文章に数多く触れ、論理の流れを追う訓練を積んでおくことが不可欠でしょう。
- 問四：「宇治拾遺物語」からの出題で、ある僧が仁王経を一心に読むことで、殿に取りついていた病魔（鬼）を追い払ったという内容です。主語や誰が何をしているのかということ、丁寧に確認する必要があります。夢の場面が挿入されるなど、昨年度よりやや読みにくい内容となっています。神奈川県入試では、鎌倉時代とその前後、特に仏教説話の出題が比較的多い点にも注意が必要です。「え～ず」「つゆ」「だに」などの古文頻出語句は、確実に意味を押さえておきましょう。
- 問五：美術部の作品制作における表現の幅を広げることをテーマとした問題で、形式、記述量ともに昨年度と同等でした。【Kさんのメモ】が整理され論点が把握しやすくなりました。記述問題は、指定語句の「枠」「表面的」を手がかりに本文とメモの内容を的確にまとめることができれば、比較的取り組みやすい内容でした。